

2月



父母と学ぶ会だより

NO5～研修報告号～ H25.2月発行

平成 24 年度 第 3 回

平成 25 年 1 月 25 日

『ひもときシートを活用した認知症ケアの 気づきを学ぶ研修会 in 静岡』

ゆいまあるが設立して 10 年が経ちました。18 歳だった利用者さん達も 28 歳となり、まだまだ先の事です。50 歳、60 歳となった時のことが気になり認知症ケアの研修会に行ってきました。

ド〇フのコントで出てくるおばあちゃん、「メシはまだかい？」を数分おきに繰り返します。おばあちゃんは認知症によっておこる脳の退行化による言葉の喪失が原因で繰り返します。言葉の喪失とは話せる言葉が少なくなるということで、その人にとっては表出方法が減ってしまうということです。

同じ言葉を繰り返し使う人へ対応する時、その人の認知症という異常に目を向けてしまうと支援する側の精神的疲労は大きくなります。燃えつき症候群におちいたり、過剰な投薬や施錠に頼ってしまう恐れも出てきます。

そこで「ひもときシート」を使って見方を変えていきます。認知症の人の中にある正常な部分に目を向けることで、認知症の人と同じ思いを抱えていることに気づき、共感的な理解へとつながるのです。

「ひもときシート」では現在ある行動の背景になっている様々な原因を考え、認知症の人が抱く心理的ニーズを探っていきます。ド〇フのおばあちゃんを例にとると、おばあちゃんが何度も繰り返し言う背景には、・寂しいから誰かと話をしたい・何もする事がなくて暇・食事の味付けが本人の好みと違う・自分で料理がしたい…etc という気持ちがあるのかもしれませんが。言葉の無い人や背景など情報の少ない人のニーズを探るためには、人間の欲求を段階に分類した「マズローの基本的欲求」や「5つの心理ニード」が参考になります。

本人の「～したい」を考えていき、「～したい」を叶えるための手だてを考えてゆくことで、本人の気持ちに添ったケアの計画を立てることが出来ます。本人にあったケアは人それぞれに異なり、1つの答えにあてはまるものではありません。支援者が、想像力を活かしてケアをしていくことが大切です。

見方を変えていくことで、一番大きく変わるのは、認知症の人ではなく、支援する側の関わり方だと言います。異常な行動を直そうという関わり方から、本人の思いを代弁しようとする関わり方へと変化していくのです。

知的障害者も、障害により言葉で自分の気持ちを表現することが難しい人が多くいます。個別支援計画の中に本人のニーズを取り入れる 1 つの方法として、この本人の抱えている背景や、周囲の環境から原因を探りながら本人の「～したい」を考えていく手法を今後は活用していきたいです。

(文責 栗田 百江)



アメリカで人権運動を行っているノーマン・クンツの「支えの信条」から知的障害者援助専門員を養成するためのスクーリングは始まりました。

デンマークからノーマライゼーションという思想が入り、日本の福祉はそれまでの大規模入所施設への入所から自宅への地域移行へ、措置から契約へ(支援費制度)、行政の主体は国から市町村へと大きな変化が起きました。そして、障害自体のとらえ方も、治療するという「医療モデル」から、周りの環境を変えていこうという「社会モデル」へと変化してきました。

2006年に施行された障害者自立支援法は、2013年には障害者総合支援法に移行することになっていきます。この制度の大きな特徴は、現在市区町村で行われている区分判定による支給するサービス量の決定を、相談支援事業を行う事業所がやっていくというものです。今後もすさまじいスピードで変わりゆく流れの中で、ゆいまあるとすることができること、支援の中で自分にできることを一人一人が考えていくことが大切です。(文責 栗田 百江)

静かに、聴いてください。

あなたが不適切行動と決めつけているものは、私にできる唯一の方法で
あなたに何かを伝えようとしているのかもしれない。

私の事を変えようとしなさい。

あなたにそうする権利はないのです。

(ノーマン・クンツ、エヌ・ヴァンダークリフト作「支えの信条」より抜粋)

● 青年期に合併しやすい病気について ●

(自閉症者援助技術、重複障害者援助技術より)

知的障害者が青年期から合併しやすい病気にうつ・統合失調症・成人病(生活習慣病)・歯周病が代表としてあげられます。これらは特に珍しい病気ではなく、ふつうの成人もなりやすい病気です。

知的障害者の場合は、自分で生活リズムを整えたり、予防をしたりと、気をつけることが難しいことから、ふつうの人よりこれらの病気にかかりやすく、またかかると重度化しやすい特徴があります。

自分で病気に気づき人に伝えられないことから発見が遅れて重度化してしまうことが多いのです。自分で言うことができない分、周囲の気づきが重要になります。そしてまた、周囲の人が病気について理解することも必要です。

例えばうつ状態の場合はもともと自閉症の人は感情を言語化できないために周囲が行動を本人の表情から判断します。その特徴は、睡眠障害がおこり、食欲の低下が続くことです。そして、感情の波の変化が数週間単位で変化します。

加齢とともに波は数か月単位になっていき、こだわりや、強迫行動がより強いものになる。などが挙げられます。

成人病、歯周病の他にも、体のいろいろな機能がふつうの人に比べて早いスピードで老化して退行していきます。

また、嚥下の機能も退行しやすいため、むせやすく飲みこみにくくなっていきます。

早期の発見や治療のために医療との連携が必要になり、医師の受診も増えることから、青年期、成人期の支援は家族ぬきでは行うことができません。日常のなかでの小さな変化への周囲の気づきや、家族の協力がより大切になっていきます。 (文責 栗田 百江)